Sengokuyama Journal
of Buddhist Studies
Vol. III, 2006

仙石山論集　第3号（平成18年）

日本伝来『賢愚経』の復元的研究

興津香織

日本伝来『賢愚経』の復元的研究

興津香織

はじめに

漢訳『賢愚経』[1]には高麗版（六十二話）と元明版（六十九話）の二系統あることが知られ、いずれも十三巻本である。他方、日本に伝来した『賢愚経』の平安・鎌倉古写経は七寺や金剛寺などの調査によって大半が十七巻本となっていることが判明した。その平安・鎌倉古写経は、従来知られる系統とは品題の並べ方も相違するところが多く、本書の成立を考察する上で必須の写本と考えられる。すでに契丹本、高麗本、宋本、元明本、『経律異相』中に引用される本書、東大寺本、敦煌本における調巻品次の異同についての研究が福井利吉郎氏[2]によりなされているが、福井氏はその中で、奈良写経である東大寺本を十六巻本であると主張している。

よって本稿では、十七巻本であると推測される、七寺蔵の平安時代末期写『賢愚経』現存十六巻、金剛寺蔵の鎌倉時代写『賢愚経』現存八巻、西方寺蔵の鎌倉時代写『賢愚経』現存八巻、以上の計三十二巻などと奈良写経である東大寺本を照らし合わせて、それらの関係を明らかにしつつ、福井氏の説を検討していきたい。

一、日本伝来『賢愚経』古写経諸本の概要（表2参照）

①東大寺本

東大寺本とは、「大聖武」と称される独特の体裁を有する奈良写経とされる。[3]「大聖武切」（大和切）として断簡の状態で収蔵家の手鑑に収められ、散存しているもの、或いは残欠をつなぎ合わせて一巻としたものが博物館、寺院等に数巻保存されているというのが現状であり、その全体像を把握するのは現在では不可能である。しかし、今こそ福井氏の論文と平安・鎌倉古写経によって、東大寺本の姿を明らかにしていくことができよう。

②金剛寺本、七寺本、西方寺本

七寺本は巻十を欠くのみで他は全て現存する。金剛寺本は巻五及び巻十一～十七が現存する。西方寺本は巻一、二、五、六、七、十、十二、十三が現存する。調巻品次の一致することから、この三寺院の『賢愚経』は同じ系統と考えてよい。

③石山寺本

石山寺蔵『賢愚経』は実見していないが、『石山寺の研究―一切経篇―』[4]における各巻の法量調査の記録によってその調巻品次が判断できる。そこから、石山寺本もまた、先の三寺院と同じ系統であることがわかる。

④興聖寺本

元暦元年（一一八四）の奥書を有する京都の興聖寺蔵の写本も実見していないが、『興聖寺一切経調査報告書』[5]を参照すると、三寺院の『賢愚経』と調巻品次が一致することから同じ系統であると考えられる。

二、十六巻と十七巻―福井説の検討―

①福井利吉郎「東大寺本賢愚経の研究」の概要と主張

大正元年（一九二二）に出された福井利吉郎氏のこの論文は、漢訳『賢愚経』諸本の研究において見逃すわけにはいかないものである。しかしそれ以降、日本に伝来した『賢愚経』についての研究は途絶えているといってもいい状態である。その主な原因としては、福井氏の主たる研究対象である東大寺本は調査するのが困難であることが挙げられる。博物館等に保存されている数巻以外は、収蔵家の手鑑の中などに「大聖武切」として断簡となって散存しているのであり、その実体を把握するのは不可能である。また、それ以外の日本に伝来した『賢愚経』の古写経が紹介されることがこれまでなかったことも原因と考えられる。しかし本論において七寺、金剛寺、西方寺蔵の平安・鎌倉古写経と比較検討することにより、これまで途絶えていた日本伝来『賢愚経』についての研究が再開できよう。

福井氏ははじめに東大寺本『賢愚経』が「十六巻本」であると主張し、その巻数について経録をもとに考察する[6]。『出三蔵記集』に「十三巻」とあるのが最初で、『法経録』もこれと同じとし、『歴代三宝紀』にはじめて「十五巻」とし、『大唐内典録』はこれによっており、「十六巻」という記載がはじめて見えるのは『大周刊定衆経目録』（十六巻或十七巻或十五巻）であり、『開元釈教録』（十五巻或十六巻或十七巻）も同じとする。それらの経録から推定し「十六巻本」ができたのは『大唐内典録』撰集のあととしている。そこで実際に『賢愚経』の巻数に関して経録中の記述をみていくと以下のようになっている。

出三蔵記集　十三巻[7]
衆経目録（法経録）　十三巻[8]
歴代三宝紀　十五巻[9]
衆経目録（彦琮録）　十六巻或いは十七巻[10]

衆経目録（静泰録）	十三巻或いは十六巻[11]
大唐内典録巻第三	十五巻[12]
巻第七	十三巻或いは十六巻[13]
巻第九	十三巻或いは十六巻[14]
古今訳経図記	十五巻[15]
大周刊定衆経目録	十三巻或いは十六巻或いは十七巻或いは十五巻[16]
開元釈教録	十三巻或いは十五巻或いは十六巻或いは十七巻[17]
開元釈教録略出	十三巻或いは十五巻或いは十六巻或いは十七巻[18]
貞元新定釈教目録	十三巻或いは十五巻或いは十六巻或いは十七巻[19]

「十六巻」という記述が最初に見えるのは隋翻経沙門及び学士等撰『衆経目録』（以下『彦琮録』）であり、福井氏の「『十六巻』という記載がはじめて見えるのは武周刊定目録である」というのは誤りであるとせざるを得ない。そうすると「十六巻本」ができた時期も福井氏の説とは異なってくるのであり、経録の記述からは、『彦琮録』（仁寿二年（六〇二）成立）以前の成立ということがわかる。

次に福井氏は、調巻品次の異同を契丹本、高麗本、宋本、元明本、『経律異相』の引用、東大寺本、敦煌本を使って一覧表にして比較している。その基準となっているものは三本である（宋本は第四十三品途中から第四十七品までを欠くが、それ以外の品次は元明本と一致しているため三本とする）[20]。

ついでそれぞれ高麗本以下、説明を加えていくのであるが、高麗本と三本については特筆すべきことは書かれていない。

契丹本については調巻を三本によって、また高麗本にある注記をそれに加えて類推している。

『経律異相』[21]については『賢愚経』を出典とする話が五十以上みられることから、その対応表を作成して『経律異相』がみた『賢愚経』の調巻を推定しているが、ほとんどが推定であり根拠が不明瞭な箇所もみられる。というのも、高麗本の注記と現在見ることのできる『賢愚経』諸本の対応箇所がほとんど一致しないからである。契丹本と対応する箇所がいくつか見られるとはいえ、『経律異相』の見た『賢愚経』が諸本のうちのどれに相当するかは現在明らかではない。

また敦煌本については妻木直良[22]、松本文三郎[23]の両氏により紹介された「鋸陀身施品」の末尾と「大光明王品」、「優波斯那優婆夷品」に言及する。この「大光明王品」は「大光明王始發道心縁品」のことであるが、「大光明王品」にははじめ第十六とあるのを二十八、「優波斯那優婆夷品」には第十七とあるのを二十九と品番号を書き換えてあることに関する研究である。敦煌本に関しては、福井氏の論文からかなりの年月が経っており、新たな研究が数多くなされていると思われるため、あらためて別の機会に整理したい。ただ第十六品、十七品という品番号は三本、平安・鎌倉古写経本ともに一致している。また「優波斯那優婆夷品」という品題は平安・鎌倉古写経本に一致し、三本と高麗本は「摩訶斯那優婆夷品」となっている。[24]

最後に東大寺本について考察をしているが、はじめに松本文三郎氏の「現蔵本は決して古代の形そのままを保存しているものではなかろう」（はじめ十三巻であったものが、内容が増えることによって十五巻となり、十六巻となり、遂に十七巻まで増した）という説に対し、経録を示して「賢愚経成立後百五、六十年の頃、十三、十五、十六、十七の諸巻本が並び行われていた」と反論する。

それでは続いて福井氏の東大寺本十六巻・六十九品の想定について次項で考察する。

②東大寺本＝十六巻本説の検討

福井氏は十九の収蔵家の有する実物または写真によって調査しており、四十三品をそこから特定し、その全体像を想定するという未曾有の研究をされた。しかし残念なことに、氏の見た断簡類の品名は先に言及した一覧表により知ることができても、実際に見たそれぞれの品の部分が明記されておらず、また論文中に取り上げられているのはそのなかで一部のものに限られており、詳細を把握するのは非常に困難である。もっともそれは、一覧表には断簡を「完品」、「大部分残欠」、「小部分残欠」と区別して表示してあるが、ほとんどが小部分残欠のものであるために仕方の無いことである。

なお経巻として現存し国宝となっているものは以下の通りである。

『賢愚経』巻第十五（大聖武）…一巻、奈良県東大寺

『賢愚経』残巻（大聖武）…三巻、前田育徳会

『賢愚経』残巻（大聖武）…一巻、国有（東京国立博物館保管）

『賢愚経』残巻（大聖武）…二巻、白鶴美術館

②―1　巻第十四、十五、十六の想定[25]

東大寺本の原形を今に伝え、また全体像把握の一番の手掛かりとなるのが東大寺蔵の巻第十五である。その経巻に収められた六品は次の通りである。（以下の傍線部は福井氏のいう諸本すなわち三本や高麗本と異なる箇所を表す）

梵志施佛納衣得受記品第五十八

佛始起慈心縁品第五十九

頂生王縁品第六十

蘇曼女十子品第六十一

婆世蹟品第六十二
優婆毬提品第六十三

氏の説では、この巻第十五の六品は三本では巻第十三に入れられており、その始めと終わりの二品ずつ（五百鴈聞佛法生天品と堅誓師子品、汪水中虫品と沙彌均提品）を取った形である。

三本『賢愚経』の最後の巻である巻第十三では以下の順に十品が収められている。

五百鴈聞佛法生天品第六十
堅誓師子品第六十一
梵志施佛納衣得受記品第六十二
佛始起慈心縁品第六十三
頂生王品第六十四
蘇曼女十子品第六十五
婆世蹟品第六十六
優波鞠提品第六十七
汪水中虫品第六十八
沙彌均提品第六十九

この巻第十三の始めと終わりの四品（太字のもの）は内容から見れば巻第十二の終わりの二品（二鸚鵡聞四諦品と鳥聞比丘法生天品）と同じく動物喩譚としてまとめられ、巻第十六とすれば分量も先の巻第十五とほぼ同じであるとする。またその分量とつりあうのが三本の巻十二の終わりの二品を取った四品（師質子摩頭羅世質品、檀彌離品、象護品、波婆離品）であり、それを巻十四と設定する。

三本『賢愚経』の巻第十二は以下の順に六品が収められている。

師質子摩頭羅世質品第五十四
檀彌離品第五十五
象護品第五十六
波婆離品第五十七
二鸚鵡聞四諦品第五十八
鳥聞比丘法生天品第五十九

以上の福井氏の想定を三本とともに対照表（表1）にすると次のようになる。

福井氏は東大寺本『賢愚経』巻第十四、十五、十六を以上のように想定し、これを東大寺本が十六巻本であったことの根拠としているが、その現存する巻第十五を平安・鎌倉古写経（十七巻本）の巻第十五と比較するとその品名、品番号がすべて一致していることが判明する。したがって東大寺本も十七巻本の可能性が十分考えられる。しかしながらその証左となる東大寺本巻第十七が発見されない以上直ちに確定はできないが、十六巻本説が憶測に基づくものであることは明確になったであろう。

〔表1〕三本の品次（上段）をもとに福井氏が想定した東大寺本の巻14、15、16（下段）。□内の字は三本と異なることを示す。

三本	巻数・品番号	東大寺本（福井氏想定）	巻数・品番号
師質子摩頭羅世質品	⑫—54	師質子摩頭羅世質品	⑭—54
檀彌離品	⑫—55	檀彌離品	⑭—55
象護品	⑫—56	象護品	⑭—56
波婆離品	⑫—57	波婆離品	⑭—57
二鸚鵡聞四諦品	⑫—58	梵志施佛納衣得受記品	⑮—58
鳥聞比丘法生天品	⑫—59	佛始起慈心縁品	⑮—59
五百鴈聞佛法生天品	⑬—60	頂生王□品	⑮—60
堅誓師子品	⑬—61	蘇曼女十子品	⑮—61
梵志施佛納衣得受記品	⑬—62	婆世蹟品	⑮—62
佛始起慈心縁品	⑬—63	優婆□提品	⑮—63
頂生王品	⑬—64	二鸚鵡聞四諦品	⑯—64
蘇曼女十子品	⑬—65	鳥聞比丘法生天品	⑯—65
婆世蹟品	⑬—66	五百鴈聞佛法生天品	⑯—66
優波鞠提品	⑬—67	堅誓師子品	⑯—67
汪水中虫品	⑬—68	汪水中虫品	⑯—68
沙彌均提品	⑬—69	沙彌均提品	⑯—69

②―2　巻第一、二の想定[26]

つぎに氏は某名家蔵の四巻を使って東大寺本の最初の部分を検討している。といってもその四巻は残欠の合巻で巻名が見えているものはなく、品名もごくわずかしか見えない。そのなかで、先の巻第十五でみたような「東大寺本の各巻頭の形式」（品名の前に「賢愚経」とあり、品番号の下の余白に巻数が書かれている形式をさす）に合致する品が無いことから、それらの残巻に対して話の分量を当てはめていくことによって巻第二を「波羅奈人身貧供養品第四」に始まると想定しているのである。そのようにして巻第一を第一品から第三品までと定め、その巻第一の分量と見合った分量を巻第二と推定しているために、巻第二を「宝天品」までとする。

福井氏の想定を平安・鎌倉古写経本と照らし合わせると、巻第一については一致し、巻第二は平安・鎌倉古写経本の方がそれより二品多く「慈力王血施品」で終わっている。その某名家蔵の四巻の残巻には、「須闍品第七」と「善求悪求品第三十三」の品名が見える。三本のうちの宋・元版と高麗本は「須闍提品第七」（明版「須闍提縁品第七」）となっているが平安・鎌倉古写経本では「須闍品第七」となっており、また三本のうち宋版は「善求悪求品第四十九」（元・明版は「善求悪求縁品第四十九」。高麗本は欠）となっているが、平安・鎌倉古写経本は東大寺本に一致する。つまり、東大寺本巻第四中に見えるこの二つの品名は、平安・鎌倉古写経本に一致するのである。

②―3　巻第三、四の想定[27]

また他の二巻（これも残巻の合巻）のうちのひとつから、巻第四を想定する。残欠の部分の分量とその話自体の分量をともに紙幅に当てはめることで「大光明王始發道心縁品」以下の三品（「摩訶斯那優婆夷品」、「出家功徳尸利苾提品」の二品の残欠が見られる）を巻第四と推定する。それに基づいて、先に推定した巻二の終わり（宝天品第十一）と巻第四の始め（大光明王始發道心縁品第十六）の間を巻三とする。羼提波梨品第十二、慈力王血施品第十三、降六師品第十四、鋸陀身施品第十五がそれに相当するが、降六師品の残欠が存することによっても想定している。

平安・鎌倉古写経本と比べてみると、巻第三は先の巻第二の想定により二品分のずれが生じるが、巻第四の区分は同じである。

②―4　巻第九、十の想定[28]

先の二巻のうちのもうひとつから、巻第十を想定している。「須達起精舎品」「大光明始發無上心品第四十」「勒那闍耶品第四十一」の残欠がみられることから、三本の巻第九を参考にし、紙幅に収まる分量を考慮して、東大寺本も「阿難總持品」から「淨居天請佛洗品」までを巻第十と推定している。またそれら三つの残欠の前に「大施抒海品」の残欠があり、三本においても巻第九の最初の「阿難總持品」の前に「大施抒海品」がある（「蓋事因縁品」と「大施抒海品」で巻第八を構成）ことから、東大寺本でも巻第十の前に巻第九としてその二品を想定している。

残欠の部分の中で品の番号が見えているのは「大光明始發無上心品第四十」「勒那闍耶品第四十一」であるが、三本では第四十五品、四十六品に相当し、高麗本では第四十二品、四十三品に相当する。四十、四十一に一致するのはいまのところ平安・鎌倉古写経本のみである。

以上のように東大寺本のはじめ（第一、第二、第三、第四）と終わり（第十四、第十五、第十六）の七巻分を定め、巻第九、十も仮定した（その他の推定も含め表3を参照）。

そのなかで平安・鎌倉古写経本と東大寺本の一致した点は以下の通りである。

一、巻十五の品名、品次、調巻。

二、「須闍提品」の「提」が欠字。

三、「善求悪求品第三十三」の品番号。その他の諸本は一致せず。
四、巻第一の品名、品次、品番号。
五、巻第四の品名、品次、品番号。
六、「大光明始發無上心品第四十」の品番号。その他の諸本は一致せず。
七、「勒那闍耶品第四十一」の品番号。その他の諸本は一致せず。

このうち四と五については福井氏の推定であるが、数少ない情報の中から東大寺本と平安・鎌倉古写経本と一致する点が相当数存在することから、東大寺本も十七巻本であった可能性は捨てきれない。

三、東大寺本と平安・鎌倉古写経

福井氏の論文を参照することによって、東大寺本と平安・鎌倉古写経本との一致をいくつか見出すことができたが、つぎにその両者と大正蔵などの校勘によって系統を探っていきたい。しかし先にも述べたように、現存する東大寺本は大半が数行の大和切となっており、考察するには量が少ない。よって本項では最初の手がかりとして巻第十五について校勘した。

巻第十五については複製本[29]を使うことができるが、残念なことに省略して編集されている。掲載されているのは、はじめの「梵志施佛納衣得受記品第五十八」と「佛始起慈心縁品第五十九」の全部分と「頂生王縁品第六十」の前半部と、その後半を省略[30]して「頂生王縁品第六十」最後を付け足した部分である。後半の三品「蘇曼女十子品第六十一」、「婆世蹟品第六十二」、「優婆毱提品第六十三」は全て省略されている。また平安・鎌倉古写経本のうち実見することができて、巻第十五が現存するのは七寺本（完存）と金剛寺本であるが、金剛寺本は「梵

志施佛納衣得受記品第五十八」と「佛始起慈心縁品第五十九」の全部分と「頂生王縁品第六十」のはじめの六行と六文字分が欠けている。[31] したがって実際の校勘できる部分はごく限られた箇所にならざるを得ない（表4巻第十五校勘表[32]参照）。

校勘箇所全七十六箇所のうち、東大寺本は複製本の省略により七箇所、金剛寺本は首欠部により二十一箇所が校勘不能ではあるものの、東大寺本と七寺本では六十九箇所（七十六から七を除く）のうちの五十七箇所の表記が一致する。また東大寺本と金剛寺本では四十八箇所（七十六から七と二十一を除く）中、四十一箇所が一致する。七寺本と金剛寺本では五十五箇所（七十六から二十一を除く）のうち、四十八箇所が一致する。

一方、東大寺本と大正蔵では六十九箇所中の十六箇所、東大寺本と高麗本では六十九箇所中の十六箇所、東大寺本と磧砂蔵本では六十九箇所のうち十一箇所、東大寺本と三本では宋版（思溪版）が六十九箇所中、十箇所、元版も十箇所、明版が七箇所一致する。

また七寺本、金剛寺本（まとめて平安・鎌倉古写経本）を大正蔵以下の蔵経本とそれぞれ比べると、表記の一致する数の多い順に、大正蔵、高麗本、磧砂本、三本（宋、元、明）となっている（表5参照）。

以上の巻第十五（部分）の校勘により、七寺本と金剛寺本は最も近く、東大寺本は七寺本と金剛寺本の平安・鎌倉古写経と近い系統の写本であり、他の漢訳蔵経本とは、巻数・調巻が異なっていることからも想定できるが、遠いものであることが判明した。

四、小結

以上、漢訳『賢愚経』について、日本伝来の古写経諸本を概観し、福井利吉郎氏の東大寺本＝十六巻本説を平安・鎌倉古写経本（十七巻本）と照らし合わせることによって、東大寺本がいかなる系統の写本であるかを考察

した。両者の校勘は、巻十五の一部だけであったが、東大寺本と平安・鎌倉古写経本とは一致する点が多いことから、両者は近接度の高い写本であることがわかった。

また正倉院文書における『賢愚経』に関しては、十六巻、十七巻ともに記述がみられることから奈良朝には両本が存在したことが推察できるが、福井氏の論証からでは東大寺本が十七巻本であるとの明証を見いだすことは困難である。してみると東大寺本を十六巻本とする推定は確証は無いものの妥当性を有することは明らかであろう。

注

（1）『賢愚経』（大正蔵第四巻、No二〇二）は『賢愚因縁経』ともいい、その成立は『出三蔵記集』巻第九の「賢愚経記」（大正蔵巻第五五、六七頁・c・九～六六頁・a・一）によると、于闐の大寺において五年に一度の大会（般遮于瑟会）があり、河西の沙門である曇覺、威徳など八人がそこで聴講した。それぞれが聞いたことを訳出し、あとで高昌に帰ってから集めて一部とした。涼洲において釈慧朗がこの経の内容から考えて『賢愚経』と名付け、四四五年（元嘉二十二年・北魏太平眞君六年）に成立した。なお訳者に「慧覺等」とあるのは慧得、曇覺などのことである。

『仏書解説大辞典』（第三巻、二一〇頁）によると『賢愚経』はAvadānaに属し、『撰集百縁経』『雑宝蔵経』とともに仏教文学中の三大部の一をなすものである。その内容は六九品（六九話）からなり、現在の行為を過去の物語によって説明したもの（通常のAvadāna形式のもの）が五三、本生譚と結びついたもの一、現在の行為を過去の物語によって説明するとともに未来の授記をなしたもの五、現在の行為に追随する現在の果報を説いたもの一〇となっている。

（2）福井利吉郎「東大寺本賢愚経の研究」（『藝文』三巻一一・一二号、一九一二年）…『福井利吉郎美術史論集』上

（中央公論美術出版、平成十年）に再録。

（3）東大寺本は奈良写経とされるが、『日本古写経集成』の解説（飯島春敬）によると中国から請来された説もあるという。

（4）『石山寺の研究―一切経篇―』（石山寺文化財綜合調査団編、法蔵館、昭和五三年）

（5）『興聖寺一切経調査報告書』（『京都府古文書調査報告書、第十三集』、京都府教育委員会編集、一九九八年）

（6）福井前掲論集二四六～二四七頁

（7）『出三蔵記集』巻第二（大五五、一二頁・c・一五）

（8）『衆経目録』（法経録）巻第三（大五五、一二八頁・a・三）

（9）『歴代三宝紀』巻第九（大四九、八五頁・a・一二）

（10）『衆経目録』（彦琮録）巻第一（大五五、一五四頁・a・一一）

（11）『衆経目録』（静泰録）巻第一（大五五、一八六頁・b・一九）

（12）『大唐内典録』巻第三（大五五、二五六頁・b・二七）

（13）『大唐内典録』巻第七（大五五、二九八頁・b・二四）

（14）『大唐内典録』巻第九（大五五、三二二頁・a・一六）

（15）『古今訳経図紀』巻第三（大五五、三六〇頁・a・一五）

（16）『大周刊定衆経目録』巻第七（大五五、四一三頁・b・一五）

（17）『開元釈教録』巻第六（大五五、五三九頁・b・二六）、巻第二十（大五五、六九六頁・a・二九）

（18）『開元釈教録略出』巻第四（大五五、七四四頁・a・一六）

（19）『貞元新定釈教目録』巻第九（大五五、八三七頁・c・二五）

(20) 福井前掲論集二四七～二五一頁
(21) 『大正蔵』巻第五三巻、№二一二二
(22) 妻木直良「敦煌石室五種佛典の解説」（『東洋学報』一―三、一九一一年）
(23) 松本文三郎「敦煌本大雲経と賢愚経」（『藝文』三巻四・五号、一九一二年）
(24) 福井前掲論集二五七～二五八頁
(25) 福井前掲論集二六六～二六七頁
(26) 福井前掲論集二六七～二六八頁
(27) 福井前掲論集二六八～二七〇頁
(28) 福井前掲論集二七〇～二七三頁
(29) 『日本古写経集成』一一「伝聖武天皇　賢愚経　大和切」書藝文化新社、平成一二年
(30) 東大寺本の「頂生王縁品第六十」後半部の省略は、大正蔵の箇所に置き換えると大四、四四〇頁・b・二二行六文字目～c九行九文字目に相当する。
(31) 金剛寺本巻十五の首欠の部分を大正蔵に置き換えると大四、四三八頁・c・二三行～四三九頁・c・三行六文字目に相当する。
(32) 校勘には大正蔵（巻第四、四三八頁・c～四四〇頁・c）、東大寺本（前掲の『日本古写経集成』一一）、七寺蔵写本、金剛寺蔵写本、磧砂蔵（巻第二十七、八五四頁・c～八五六頁・b）、高麗蔵（巻第二十九、一一一五頁・c～一一一八頁・b）を使用した。

付記：一、本稿は七寺、金剛寺、西方寺蔵『賢愚経』無しには成立し得ないものである。ご配慮賜りました七寺御住職蟹江良三師、金剛寺座主堀智範猊下、西方寺御住職西岡信敬師ならびに三寺院の御当局様に甚深の感謝を申し上げます。

二、英文要旨についてはデレアヌ　フロリン教授にご指導いただいた。先生の学恩に感謝いたします。

三、日本古写経の『賢愚経』については、日本仏教学学術大会（二〇〇六年九月七日）において三宅徹誠氏（本学附置国際仏教学研究所非常勤研究員）により「『賢愚経』における慈悲」と題して『賢愚経』諸本の系統を解明する発表がなされ、また筆者はそれに続く形で、日本印度学仏教学会第五七回学術大会（二〇〇六年九月十二日）において「『賢愚経』諸本の調巻と品題について」と題して日本における『賢愚経』の系統について発表した。

古写経品名（西方寺）	参考（石山寺本）	宋元明版	宋元明版
賢愚經卷第一（梵天請法六事品）	賢愚經　卷一	（梵天請法六事品）	①-1
摩訶薩埵以身施虎品第二		摩訶薩埵以身施虎品	①-2
二梵志受齊品第三		二梵志受齋品	①-3
（波羅奈人身供養品第四）	賢愚經波羅奈人身供養品第四	波羅奈人身貧供養品	①-4
海神難問船人品第五		海神難問船人品	①-5
恒伽達品第六		恒伽達品	①-6
須闍品第七		須闍提品	①-7
波斯匿王女金剛品第八		波斯匿王女金剛品	②-8
金財品第九		金財因緣品	②-9
華天品第十		華天因緣品	②-10
寶天品第十一		寶天因緣品	②-11
屬提婆梨品第十二		屬提波梨品	②-12
慈力王血施品第十三		慈力王血施品	②-13
	賢愚經降六師品第十四	降六師品	②-14
		鋸陀身施品	③-15
	賢愚經大光明王始發道心品第十六	大光明王始發道心緣品	③-16
		摩訶斯那優婆夷品	③-17
		出家功德尸利苾提品	④-18
賢愚經沙彌守戒自殺品第十九	賢愚經沙彌守戒自殺品第十九	沙彌守戒自殺品	④-19
長者無耳目舌品第二十		長者無耳目舌品	④-20
貧人夫婦疊施得現報緣品第二十一		貧人夫婦疊施得現報品	④-21
迦旃延教教老母賣貧品第二十二		迦旃延教老母賣貧品	④-22
金天品第二十三		金天品	⑤-23
賢愚經重性品第二十四	賢愚經重性品第二十四	重姓品	⑤-24
散檀寧品第二十五		散檀寧品	⑤-25
月光王頭施品第二十六		月光王頭施品	⑤-26
賢愚經梨耆彌七子品第二十七	賢愚經梨耆彌七子品第二十七	快目王眼施緣品	⑦-33
大劫賓寧品第二十八		五百盲兒往返逐佛緣品	⑦-31
微妙比丘尼緣品第二十九		富那奇緣品	⑦-32
	賢愚經設頭羅健寧品第三十	尼提度緣品	⑦-34
		大劫賓寧品	⑦-35
		微妙比丘尼品	⑩-48
		梨耆彌七子品	⑩-49

〔表2〕古写経と三本の品次（網掛け部分は三本と異なる品名を示す。また金剛寺本の（　）は品の全体或いは部分の欠落により推定）

古写経巻数	古写経品番号	古写経品名（七寺）	古写経品名（金剛寺）
巻一	1	賢愚經卷第一（梵天請法六事品）	
巻一	2	摩訶薩埵以身施虎品第二	
巻一	3	二梵志受齊品第三	
巻二	4	波羅奈人身供養品第四	
巻二	5	海神難問船人品第五	
巻二	6	恒伽達品第六	
巻二	7	須闍品第七	
巻二	8	波斯匿王女金剛品第八	
巻二	9	金財品第九	
巻二	10	華天品第十	
巻二	11	寶天品第十一	
巻二	12	鬻提婆利品第十二	
巻二	13	慈力王血施品第十三	
巻三	14	降六師品第十四	
巻三	15	鋸陀身施品第十五	
巻四	16	大光明王始発道心品第十六	
巻四	17	優婆斯那優婆夷品第十七	
巻四	18	出家功徳尸利苾提縁品第十八	
巻五	19	賢愚經沙彌守戒自殺品第十九	賢愚経沙彌守戒自殺品第十九
巻五	20	長者無耳目舌品第二十	長者無耳目舌品第二十
巻五	21	貧人夫婦疊施得現報縁品第二十一	貧人夫婦疊施得現報縁品第二十一
巻五	22	迦旃延教老母賣貧品第二十二	迦旃延教老母賣貧品第二十二
巻五	23	金天品第二十三	金天品第二十三
巻六	24	賢愚經重性品第二十四	
巻六	25	散檀寧品第二十五	
巻六	26	月光王頭施品第二十六	
巻七	27	賢愚經梨耆彌七子品第二十七	
巻七	28	大劫賓寧品第二十八	
巻七	29	微妙比丘尼縁品第二十九	
巻八	30	設頭羅健寧品第三十	
巻八	31	阿輸迦土施縁品第三十一	
巻八	32	摩訶令奴品第三十二	
巻八	33	善求悪求品第三十三	

		設頭羅健寧品	⑦-36
		阿輸迦施土品	⑦-37
		七瓶金施品	⑨-40
		差摩現報品	⑨-41
		蓋事因緣品	⑨-42
	賢愚經須達起精舍品第三十九	大施抒海品	⑨-43
		阿難總持品	⑨-44
		優婆斯兄所殺品	⑨-45
		兒誤殺父品	⑨-46
		須達起精舍品	⑨-47
賢愚經婆婆梨品第四十四	賢愚經波婆梨品第四十四	大光明始發無上心品	⑫-57
二鸚鵡聞四諦品第四十五		勒那闍耶品	⑫-58
鳥聞比丘法生天品第四十六		迦毘梨百頭品	⑫-59
五百鴈聞佛法生天品第四十七		淨居天請佛洗品	⑬-61
堅誓師子品第四十八		摩訶令奴緣品	⑬-60
	賢愚經善事太子入海品第四十九	善求惡求緣品	⑩-50
		善事太子入海品	⑧-38
大施抒海品第五十一	賢愚經大施抒海品第五十一	無惱指鬘品	⑧-39
貧女難陀品第五十二	賢愚經貧女難陀品第五十二	檀膩羈品	⑪-53
檀膩羈品第五十三		貧女難陀品	⑪-52
師質子摩尼羅世質品第五十四		師質子摩頭羅世質品	⑫-54
檀彌離品第五十五		檀彌離品	⑫-55
象護品第五十六		象護品	⑫-56
	賢愚經無惱指鬘緣品第五十七	波婆離品	⑪-51
	賢愚經梵志施佛納衣得受記品第五十八	二鸚鵡聞四諦品	⑬-62
		鳥聞比丘法生天品	⑬-63
		五百鴈聞佛法生天品	⑬-64
		堅誓師子品	⑬-65
		梵志施佛納衣得受記品	⑬-66
		佛始起慈心緣品	⑬-67
	賢愚經五百盲兒往返逐佛緣品第六十四	頂生王品	⑥-28
		蘇曼女十子品	⑬-68
		婆世蹟品	⑬-69
		優波毱提品	⑥-27
		汪水中虫品	⑥-30
	賢愚經富那奇品第六十九	沙彌均提品	⑥-29

巻八	34	七瓶金施品第三十四	
巻八	35	差摩現報品第三十五	
巻八	36	阿難總持品第三十六	
巻八	37	優婆斯兄所殺品第三十七	
巻八	38	見設殺父品第三十八	
巻九	39	須達起精舎品第三十九	
巻九	40	大光明始発無常心品第四十	
巻九	41	勒那闍耶品第四十一	
巻九	42	迦毘梨百頭品第四十二	
巻九	43	浄居天請洗品第四十三	
巻十	44		
巻十	45		
巻十	46		
巻十	47		
巻十	48		
巻十一	49	善事太子入海品第四十九	善事太子入海品第四十九
巻十一	50	益事因縁品第五十	益事因縁品第五十
巻十二	51	大施抒海品第五十一	（大施抒海品第五十一）
巻十三	52	貧女難陀品第五十二	貧女難陀品第五十二
巻十三	53	檀膩羈品第五十三	檀膩羈品第五十三
巻十三	54	師質子摩尼羅世質品第五十四	師質子摩尼羅世質品第五十四
巻十三	55	檀彌離品第五十五	檀彌離品第五十五
巻十三	56	象護品第五十六	象護品第五十六
巻十四	57	賢愚經無惱指鬘縁品第五十七	無惱指鬘縁品第五十七
巻十五	58	梵志施仏納衣得受記品第五十八	（梵志施仏納衣得受記品第五十八）
巻十五	59	佛始起慈心縁品第五十九	（佛始起慈心縁品第五十九）
巻十五	60	頂生王縁品第六十	（頂生王縁品第六十）
巻十五	61	蘇曼女十子品第六十一	蘇曼女十子品第六十一
巻十五	62	婆世蹟品第六十二	婆世蹟品第六十二
巻十五	63	優波毬提品第六十三	優婆毬提品第六十三
巻十六	64	五百盲兒往返逐佛縁品第六十四	（五百盲兒往返逐佛縁品第六十四）
巻十六	65	汪水虫品第六十五	汪水虫品第六十五
巻十六	66	沙彌均提品第六十六	沙彌均提品第六十六
巻十六	67	快目王眼施品第六十七	快目王眼施品第六十七
巻十六	68	尼提度縁品第六十八	尼提度縁品第六十八
巻十七	69	富那奇品第六十九	富那奇品第六十九

〔表 3〕福井氏推定東大寺本と元明本の巻・品番号（網掛け部分）と古写経の対応表

福井氏推定		東大寺本	元明本		古写経
巻一	1	梵天請法六事品	①-1	梵天請法六事品	①-1
	2	摩訶薩埵以身施虎品	①-2	摩訶薩埵以身施虎品	①-2
	3	二梵志受齋品	①-3	二梵志受齋品	①-3
巻二	4	波羅奈人身貧供養品	①-4	波羅奈人身供養品	②-4
	5	海神難問船人品	①-5	海神難問船人品	②-5
	6	恒伽達品	①-6	恒伽達品	②-6
	7	須闍提品	①-7	須闍品	②-7
	8	波斯匿王女金剛品	②-8	波斯造王女金剛品	②-8
	9	金財因縁品	②-9	金財品	②-9
	10	華天因縁品	②-10	華天品	②-10
	11	寶天因縁品	②-11	寶天品	②-11
巻三	12	羼提波梨品	②-12	羼提婆利品	②-12
	13	慈力王血施品	②-13	慈力王血施品	②-13
	14	降六師品	②-14	降六師品	③-14
	15	鋸陀身施品	③-15	鋸陀身施品	③-15
巻四	16	大光明王始發道心縁品	③-16	大光明王始發道心品	④-16
	17	摩訶斯那優婆夷品	③-17	優婆斯那優婆夷品	④-17
	18	出家功徳尸利苾提品	④-18	出家功徳尸利苾提品	④-18
巻五	19	沙彌守戒自殺品	④-19	沙彌守戒自殺品	⑤-19
	20	長者無耳目舌品	④-20	長者無耳目舌品	⑤-20
	21	貧人夫婦疊施得現報品	④-21	貧人夫婦疊施得現報縁品	⑤-21
	22	迦旃延教老母賣貧品	④-22	迦旃延教老母賣貧品	⑤-22
巻六	23	金天品	⑤-23	金天品	⑤-23
	24	重姓品	⑤-24	重姓品	⑥-24
	25	散檀寧品	⑤-25	散檀寧品	⑥-25
	26	月光王頭施品	⑤-26	月光王頭施品	⑥-26
巻七	27	快目王眼施縁品	⑥-27	梨者彌七子品	⑦-27
	28	五百盲兒往返逐佛縁品	⑥-28	大劫賓寧品	⑦-28
	29	富那奇縁品	⑥-29	微妙比丘尼縁品	⑦-29

〔表３　続き①〕

	30	尼提度縁品	⑥-30	設頭羅健寧品	⑧-30
巻十一	44	大劫賓寧品	⑦-31	阿輸迦土施縁品	⑧-31
	45	微妙比丘尼品	⑦-32	摩訶令奴品	⑧-32
	46	梨耆彌七子品	⑦-33	善求悪求品	⑧-33
巻十三	50	設頭羅健寧品	⑦-34	七瓶全施品	⑧-34
	51	阿輸迦施土品	⑦-35	差摩現報品	⑧-35
	52	七瓶金施品	⑦-36	阿難總持品	⑧-36
	53	差摩現報品	⑦-37	優婆斯兄所殺品	⑧-37
巻九	34	蓋事因縁品	⑧-38	兒誤殺父品	⑧-38
	35	大施抒海品	⑧-39	須達起精舍品	⑨-39
巻十	36	阿難總持品	⑨-40	大光明始發無上心品	⑨-40
	37	優婆斯兄所殺品	⑨-41	勒那闍耶品	⑨-41
	38	兒誤殺父品	⑨-42	迦毘梨百頭品	⑨-42
	39	須達起精舍品	⑨-43	淨居天請佛洗品	⑨-43
	40	大光明始發無上心品	⑨-44	波婆離品	⑩-44
	41	勒那闍耶品	⑨-45	二鸚鵡聞四諦品	⑩-45
	42	迦毘梨百頭品	⑨-46	鳥聞比丘法生天品	⑩-46
	43	淨居天請佛洗品	⑨-47	五百鴈聞佛法生天品	⑩-47
巻八	32	摩訶令奴縁品	⑩-48	堅誓師子品	⑩-48
	33	善求悪求縁品	⑩-49	善事太子入海品	⑪-49
	31	善事太子入海品	⑩-50	益事因縁品	⑪-50
巻十二	47	無惱指鬘品	⑪-51	大施抒海品	⑫-51
	48	檀膩羈品	⑪-52	貧女難陀品	⑬-52
	49	貧女難陀品	⑪-53	檀膩羈品	⑬-53
巻十四	54	師質子摩頭羅世質品	⑫-54	師質子摩頭羅世質品	⑬-54
	55	檀彌離品	⑫-55	檀彌離品	⑬-55
	56	象護品	⑫-56	象護品	⑬-56
	57	波婆離品	⑫-57	無惱指鬘品	⑭-57
巻十六	64	二鸚鵡聞四諦品	⑫-58	梵志施佛納衣得受記品	⑮-58
	65	鳥聞比丘法生天品	⑫-59	佛始起慈心縁品	⑮-59
	66	五百鴈聞佛法生天品	⑬-60	頂生王縁品	⑮-60

〔表３　続き②〕

	67	堅誓師子品	⑬-61	蘇曼女十子品	⑮-61
巻十五	58	梵志施佛納衣得受記品	⑬-62	婆世蹟品	⑮-62
	59	佛始起慈心縁品	⑬-63	優婆毬提品	⑮-63
	60	頂生王品	⑬-64	五百盲兒往返逐佛縁品	⑯-64
	61	蘇曼女十子品	⑬-65	汪水中虫品	⑯-65
	62	婆世蹟品	⑬-66	沙彌均提品	⑯-66
	63	優波毬提品	⑬-67	快目王眼施縁品	⑯-67
巻十六	68	汪水中虫品	⑬-68	尼提度縁品	⑯-68
	69	沙彌均提品	⑬-69	富那奇縁品	⑰-69

〔表 4〕巻第十五校勘表（網掛け部分は東大寺本と古写経本の一致を示す。斜線は欠の部分、○は大正蔵と同じ文字を示す）

大（頁段行）	大正蔵	東大寺本	七寺本	金剛寺本	磧砂蔵本	三本	高麗本	
439a02	甿	疊	疊		○	○	○	
2	甿	納	納		○	○	○	
5	二	満	満		○	○	○	
6	授	受	○		○	○	○	
9	甿	疊	疊		○	○	○	
14	鉢	○	○		婆	婆	○	
18	貪	○	○		願	願	○	
23	大王	天王	天王		○	○	○	
27	大臣	大王	大王		大王	大王	○	
439b01	衣服	衣食	衣食		○	○	○	
3	時阿難	［時］阿難	［時］阿難		○	○	○	
3	聞説	聞佛説	聞佛説		○	○	○	
3	懃	勤	○		勤	○	○	
4	心懐	咸懐	咸懐		咸懐	○	心懐	
7	爾時	○	○		［爾］時	［爾］時	○	
13	挽	拋	拋		○	○	○	
14	鐵棒	鐵杖	鐵杖		○	○	○	
16	辟地	僻地	僻地		○	○	○	
16	便	復	復		○	○	○	
18	代	伐	○		○	○	○	
21	受罪之時	受罪之人	受罪之人		○	○	○	
c07	一大王	大國王	大国王	大國王	○	○	○	
8	婇女	綵女	○	○	○	○	○	
9	欻	類	○	○	○	○	○	
9	皰	胞	胞	胞	胞	胞	○	
10	劈	擗	擗	擗	擘	※	○	※宋＝擗、元明＝擘
11	紺青	紺綺	紺清	紺□	○	○	○	金剛寺本の□は虫損
13	聖王	○	○	○	聖主	聖主	○	
14	晉言	○	○	○	○	※	○	※宋元＝晉言、明＝比言
14	已	遂	遂	遂	○	○	○	
15	王	吾	吾	吾	○	○	○	
15	用	○	○	○	○	※	○	※宋元＝用、明＝別
16	免	勉	勉	勉	○	○	○	

17	便	致	致	致	○	○	○	
17	曰	白	白	白	○	○	○	
20	登祚	登位	登位	登倍	○	○	○	
23	所	○	○	○	即	卽	○	
24	適	已	已	已	○	○	○	
26	典兵悉	典兵等悉	典兵等悉	典兵等悉	○	○	○	
26	君	○	○	○	王	王	○	
27	巡行	脩行	脩行	脩行	循行	循行	○	
440a02	飲食	飯食	飯食	飯食	○	○	○	
7	賑給	振給	振給	振給	○	○	○	
9	群裂	群衆	群衆	群衆	○	○	○	
13	種種伎	種伎	種伎	種伎	種妓	※	○	※宋明＝種種伎、元＝種種妓
15	歡預	○	勸豫	○	○	○	○	
17	國民	因民	因民	因民	因民	因民	○	
19	宮裏	宮里	宮里	宮里	○	○	○	
21	時有夜叉	時夜叉	時夜叉	時夜叉	○	○	○	
23	則	即	即	即	即	卽	○	
26	自恣	自姿	自姿	自姿	○	○	○	
27	彼王卽	彼即	彼即	彼即	○	○	○	
27	允然往遊	允然可往遊	久然可往遊	允然可往遊	○	○	○	
29	曰	○	○	○	○	※	○	※宋元＝曰、明＝越
29	安豊	豊樂	豊樂	豊樂	○	○	○	
440b01	留止	○	○	○	○	※	○	※宋＝留心、元明＝留止
4	四天	四王	四王	四天王	○	○	○	
5	兵衆	軍衆	軍衆	軍衆	徒衆	徒衆	○	
6	優遊	○	復遊	○	隨遊	隨遊	○	
6	經數十億	經十四億	經十四億	經十四億	○	○	○	
8	象馬	○	象	象	○	○	○	
8	屎尿	尿尿	尿尿	尿尿	○	○	○	
14	感致	咸致	○	○	○	○	○	
15	王邊扶輪	其邊扶車	其邊扶車	其邊扶車	○	○	○	
15	未至之	未到之	未到之	未到之	○	○	○	
17	怖畏	○	○	○	惶怖	惶怖	○	
22	視	○	○	○	眼	眼	○	
24	大迦葉		迦葉菩薩	迦葉菩薩	○	○	○	
24	興		与	○	與	與	○	
440c01	何以報之		以何緣報之	以何緣報之	○	○	○	
2	由貪而死		由貪死	由貪死	○	○	○	

6	宿殖		○	○	宿植	宿植	○	
6	而獲		得獲	得獲	○	○	○	
9	娶		取	取	○	○	○	
10	曩世	棄世	棄世	棄世	○	○	○	
10	家之	○	○	○	之家	之家	○	

〔表 5〕

Ⅰ．東大寺本と諸本の一致（一致数：表記の一致、総数：校勘の総数）

諸本	七寺	七寺②	金剛寺	大正蔵	高麗本	磧砂本	宋	元	明
一致数／総数	57／69	40／48	41／48	16／69	16／69	11／69	10／69	10／69	7／69

※七寺②とは金剛寺本と対応させるべく、金剛寺本の首欠部と同部分を差し引いた箇所を示す.

Ⅱ．七寺本と諸本（東大寺本は表Ⅰ）の一致

諸本	金剛寺	大正蔵	高麗本	磧砂本	宋	元	明
一致数／総数	48／55	20／76	20／76	15／76	15／76	15／76	12／76

Ⅲ．七寺本②と諸本（東大寺本は表Ⅰ）の一致

諸本	金剛寺	大正蔵	高麗本	磧砂本	宋	元	明
一致数／総数	48／55	14／55	14／55	11／55	11／55	11／55	8／55

Ⅳ．金剛寺本と諸本（東大寺本は表Ⅰ）の一致

諸本	七寺	大正蔵	高麗本	磧砂本	宋	元	明
一致数／総数	48／55	17／55	17／55	11／55	11／55	11／55	7／55

参考文献リスト

『仏書解説大辞典』第三巻（大東出版社、二〇〇〇年）
『福井利吉郎美術史論集　上』（平成十年、中央公論美術出版）
『石山寺の研究―一切経篇―』（石山寺文化財綜合調査団編、法蔵館、昭和五十三年）
『興聖寺一切経調査報告書』（『京都府古文書調査報告書、第十三集』、京都府教育委員会編集、一九九八年）
妻木直良「敦煌石室五種佛典の解説」『東洋学報』（一―三、一九一一年）
松本文三郎「敦煌本大雲経と賢愚経」『藝文』（三巻四・五号、一九一二年）
『日本古写経集成』一一「伝聖武天皇　賢愚経　大和切」（書藝文化新社、平成十二年）

Summary

Towards a Reconstruction of the Version of the *Sutra of the Wise and the Fool* Transmitted in Japan

Kaori Okitsu

It is well-known that the text of the Chinese translation of the *Sutra of the Wise and the Fool* (Taishō vol. 4, No. 202) survives in two lineages: (1) the Korean Canon version, which contains 62 stories; and (2) the Yuan-Ming Canons recension which has 69 stories. Both versions are divided into 13 scrolls 十三卷. On the other hand, the majority of the Japanese manuscripts copied during the Heian and Kamakura Periods amount to 17 scrolls. Furthermore, the Heian-Kamakura MSS lineage also shows differences in the order of the chapter titles. The dissimilarities in the scroll division and chapter order between various textual witnesses (Khitan Canon, Korean Canon, Song Canon, Yuan-Ming Canons, Tōdaiji MS, Dunhuang MS) as well as in the citations in the *Jing lü yi xiang* 經律異相 have been analysed by Fukui Rikichirō 福井利吉郎. According to the Japanese scholar, the Tōdaiji 東大寺 MS consists of 16 scrolls. In this paper, I focus on the examination of three newly discovered textual witnesses: (1) the Kongō-ji 金剛寺 MS in 8 scrolls, dating from the Kamakura Period ; (2) the Nanatsudera 七寺 MS in 16 scrolls, copied at the end of the Heian Period ; and (3) the Saihō-ji 西方寺 MS in 8 scrolls, which goes back to the Kamakura Period. I also discuss Fukui's hypothesis in the light of these new findings.

Postgraduate Student,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies